

紹介

中世社會の研究

中村吉治著

近世初期農政史研究に關して、先に一書を著はされた著者は中世から近世への轉換期に研究の中心をおいてその社會經濟史の方面を開拓してゆかれる中に、中世後期に視野を擴げ、各種の農政史方面の論著を公にされた。本書はその諸篇を收輯されたもので

- 第一、中世の社會問題
- 第二、中世農民の反抗
- 第三、田地に神木を立てること
- 第四、水の分配
- 第五、地水分配
- 第六、中世農業勞働の一例
- 第七、近世初期に於ける勸農に就いて
- 第八、安土桃山時代と徳政
- 第九、初期加賀藩の田租に就いて

の九篇より成り立つが、何れも一度何等かの形式で發表されたものを多少修補して收められたものであるから一々の内容に就いて紹介する事を差し控へるが、就中第三の「田地に神木を立てること」

と、及び第四の「水の分配」は吾人の興味をもつて讀んだものであり、農政史研究がこの方面にまで觸れて行つた事を喜んだ記憶を新たにす。正に、水の問題、點札の問題の如き、案外重要な命題が農業史の方面に取り殘されて居つたもので、更に井ノ口の問題、溝の問題、堤の修築、虫害の豫防の如き今後採り上げられべき問題であらう。

たゞ本書の書名が内容と些か合致しない趣があるが、併し著者はその點に就いては、第一の「中世の社會問題」の項に於いて、著者の言はんとする中世社會を規定して居る所があるから、深く咎めるには足らないかとも思ふ。次の時代の我國史界を引受ける人であらう著者の精進を期待して已まぬ一人として、この紹介の言葉を喜んで執筆した。(河出書房發行、定價四、五〇)〔中村直勝〕

北方文化研究報告

北海道帝國大學北方文化研究室編

エレム鐘がひびきわたる新進の北海道には今なほアイヌが古い生活を保持しつゝ生きながらへてゐる。而も次第に消滅への道をたどりつゝある現狀に於いて、我が體質人類學徒、民族學者の間に彼等の研究の必要が高唱されるに至つたことは當然の事である。昭和十二年北海道帝國大學に北方文化研究室が附設されて、こゝに研究報告が續刊されることになつたのは中で最も注意せらるべきものゝ一つとしよう。而して今總長の發刊の辭に於ける「我が大學に於ても、其の未然の使命たる自然科學の研究に加ふるに、